A90
2765

是書異本あり表紙に其蜩菴随筆上中下と題す上には巻一二、中には三四、下には五なり表紙裏に貞幹大人撰其蜩菴随筆全三冊大阪書林文栄堂三友堂合梓とあり巻末に文栄堂（大阪心斎橋通北久宝寺町河内屋前川源七郎）の蔵板書目を附す書中年号ある処には一々刪りありたるより推するに奸商の所為なること掲焉なり

明治三十二年二月二十八日

## 翁草叙 一名其蜩菴随筆序

聖人詩書禮易之外、繼之述春秋、以勸懲補翼民心、春秋之外、因有國史、國史之裂、復有稗官、雖不及國史論世品人、須逆抑揚、稱為文章爾雅、而其事必信、淑慝益明、則苟以勸懲補翼民心者、安輕而棄蔑之哉、本邦亦儆作史、亦有稗官、京師人神澤貞幹著翁草一編、開卷観之、亦稗官之流、而百四五十年來世説口碑所傳、採摭無遺、稽考悉備、其出于當時雜筆、或詢諸古老、或採佚秘録、前世則裔孫、當今則郷貫、必問而究之、鄙書並説

正其謬解、周鼠鄭璞辨其異評、抉牘讀等悉之碑、薰胸得忠憲之謚、其勤亦苦矣、假使其心專手傳事情、乃能激義膽、稗名教、功尚未可闕而已、與彼喜倍悭力、貴戲笑、徒貪俚兒一拍掌而止者、相去不亦遠耶、世讀之、道聽塗說、特誇其多、曰是自勝場、則買櫝還珠、非所以徽焉而作者之所歎也、

安永五年丙申正月　魯堂撰



# 隨筆自序

みじか夜をあかしまゝなをも月花晩まつ心地あんしまゝ老の耳にさへ乃い垂津きなきまゝに拾遺しいましつをれぬるにくれい長閑哉御代に住ゐかな春秋をくらし流れゆくの書物の書き名ある人の言葉は世をめつらかなるさ聞れたをきる人の身まつりむ好みを書紀指ひとのしまゝ成るされつをのの翁乃おもふれぬかこ耳に残りしをも賞者のみ藻塩草うらあ汲め尚書くとふ深きうらそ

これを翁草といふ

明和九の秋たつの若月 イ瀬

其蜩庵人溪志



其蜩翁草目録 イ瀬

巻之壹

星野勘左衛門和佐大八事

佐川田喜六詠歌事

長壽なる人之沙汰

近世和歌なる沙汰

源義経渡蝦夷許

楠子三代之許

太閤秀吉公之許

巻之二

富士山焼之事

江戸吉原松葉屋瀬川事

巻之三

毛利安鶯物語之事
悔鳥坊事
半時庵淡々之事
山おりしの傳　イ此間ニ目録の二字を容入
撮合山記
玉くしけの傳

巻之四　イ瀬

茨木屋幸斎事
中村内蔵介事
歌舞妓浄瑠璃盛衰　イ之事
市川海老蔵澤村宗十郎　証　數人之説
堀井仙助道成寺能之事
謡曲更科之事
角力取渦ヶ崎事

巻之五

思ひ出し次第
イ漂流人之事

イ巻中總標目畢

翁草巻之壹　其蜩菴随筆巻之一

星野勘左衛門和佐大八事

矢數ハ濫觴ハ慶長十一年。浅岡平兵衛と云ふ士。洛東三十三間堂に於て。其弓勢を試ミ初しむ。相續いて天下乃諸士。之を励ミ競ふもの多く出て。其傍りて徒矢を稽古し。而して後堂を登て一さしにしてこれを通矢ある哉。帳面と号け。是より百射。千射。日矢數を面々が望に任せて。弓勢を様々。甚度く堂見松井某へ達すれば則堂見乃方より役人をおし。櫓乃上より麾を振て通矢を定む。浅岡平兵衛以来。互にの逢ちに進んで先輩の通矢を射越す。是哉趣

匯叶藏書

ゑぬれハ爰に國筆を日本三幅對とするも宜なり
されや。他説く云へハ今胡乱なる人なきにしもあらねども古
てハ飛鳥の聖徳太子。吉備公。菅公。弘法大師等を始め。
僧俗の間に。後世に輝く人とハあまたあれども。皆聖
賢佛菩薩の顕ひにして。支那印度の地よりしてへとの
あり。此三傑ハ三國に無比類をもての物數寄表具也

翁艸巻之一畢 イ欠

翁艸巻之二 イ其蜩庵随筆巻之二

富士山焼之事　　其蜩翁撰 イ欠

寶永四丁亥年十一月廿日比ら江府中天氣曇雲。[illegible]寒
甚敷縁繁なるに。同廿三日午ノ刻時分ハ俄に共なるを
震動し。雷鳴頻りにして。西南の方へ一墨を塗るが如く起
雲靉き。雲間より夕陽移りて猶もおそれまじき氣色なる
ろが。程なく黒雲一面に掩ひ闇夜の如く。晝八ツ時分
鼠色なる灰を降らし江府の諸人魂を消して惑ふ
然るに老人の申されしハ。此二十八九年以前か様の事有
しハ寛文信州淺間の焼る灰なりと云。仍諸人少
し心を定めしかども漸く晩景に至り夜に入ル

りし穴巣。
たゞ鍛ふ　杉瀧、
丁子屋の雛形へ遣しけるなく。此ゑにて其材ハ
きれたり。惜し。下卑らしげをあらじとぞ憾ふ。

翁艸巻之二畢　イ欠

岡本蔵

# 翁草巻之三　イ其蜩庵随筆巻之三

其蜩翁撰　イ欠

松平様校定書

岡本蔵

## 毛利安芸物語の事

毛利安芸と云老人。生得篤実にて。仮ニも虚誕無人なしが。此物語ニ。某も長曽我部盛親ニ属し籠城せし事ありしが。戦場の事ハ。今時の壮士達の夢の上ニも推量せしことと違ひ。容易なる手柄など物ニ非ず。先籠城と云ハ。昼夜の境なく。心をくるしめ。寒暑の防もなく。兵粮とてハ黒米飯お湯ニ付て塩を嘗る斗。稍く肌を融せ寄手ハ竹束の陰ニ武具を枕とし露霜ニ侵されて夜を明し。城中ハ猶も篭狭をさるゝ。今や寄する。今や夜討と寝食をも忘るゝ事ままなる

此所神の三只好色に愛めむ。名にそ立田乃神は抱かい。
享保初朔より。今天明の冠をとへを夕つとと。
一篇は道を書きて徑一寸ぞ。あしきつめは。お后
し茎子がよりて袖のこゝろしきに愧ぞ。宮も宮古の包
なりふり 或人曰ク慶ー子カ粧ハ為ス人ノ此ノ叟ノ粧ハ為ス自ノ以レ是視レ之。慶ー子カ粧ヤ也。艶テ陋シ矣。此ノ叟ノ粧ヤ也。嬌ニ
高シ矣。世をびりてかる神楽のみも賞んるを號し。將この
上つ鬢をとりひかふち青黛日に篤く清めたふ
と白ス。

翁草巻之三畢　イ欠

岡本藏

浄瑠璃ノ始　五丁　劇場ノ始　同上　海老蔵、宗十郎等　八丁



蕩を究め。己が居間に金襖水晶の障子輝きけり。
竜宮殿のごとく。朝夕掛盤に饗膳の式に等しく。
日々に献立をなし料理を伺ふ。庖丁人山海の珍味を
整て。之を吝まずあまさて抱の傾城禿をとめく配膳給
仕をなし己が口に叶はざる料理をば是を膳に蹴遣し。剰
錦繍を衣とし。厠所の敷皮梨子地の曲录その
驕る位の人にも超。其頃八文字屋自笑が出せし草
紙にも傾城竈将軍と題せし五冊ものに著はし後を

彼所神の二只好色を愛めむ。名こそ立田乃神ハ抱かい。
享保わ冨れ朝より。今天明の冨をとゝを夕べとと。
一篇は道を見きて径一寸しを取く志き波めい。知ら
し茎子らかり袖のうつーぞよ愧ぞ。実も宮古の色
なりかふ 或人曰ク慶子ガ粧ハ為レ人ヲ。此ノ叟ノ粧ハ為二自ノ一。以レ是視レ之。慶子ガ粧ヤ也。艶ニシテ陋シ矣。此ノ叟ノ粧ヤ也。嬌ニシテ高シ矣。
世くぐりてかゝる神拙のみも出ん事なし。将この
上うとは髪をふりひねふち青黛日に篤く清めたふ
と白ス。

翁草巻之三畢 イ欠

翁草巻之四 イ其蜩菴随筆巻

甚蜩翁撰 イ欠

茨木屋幸斎事

浪華新町。傾城屋茨木屋幸斎といへる有り。彼が物好ぬ
事を究め。己が居間ハ金襖氷晶の障子輝きけり。
宛宮殿のごとく。朝夕掛盤まで食器の式ま等しく。
日々に献立をして料理を伺ふ。庖丁人山海の珍味を
整て之を容をあまた抱の傾城禿迄めぐく。配膳給
仕を己が心にかなはざる料理をは呈てず。勝手へ返し。男
らい錦繍を衣とし。艤所の炭皮梨子地の曲录そのる
奢る位の人にも超へ。甚だ八文字屋自笑が出せし草
紙にも傾城竈将軍と題せし五冊ものはこの後を

捗つき手段有りて変に。たとへ今を盛りの宗統乃者
共。爰に工夫付ざるや。悪く負ぬ。兎角ハ壱くさりとも
取りて見つぐる事なれども。取出の角力にきらはれを掛る
時ハ取出の方勝なれば必ず只一番なりとも掲く。是
等ハ折角望て立合ひても詮なしと成し。頃日ハ
勝負を出させる工夫を設けしが。此日漸く成りぬ。取
組て勝ぬるを工夫ハ別義にあらず手合を設けし者。如何
の概をえらびしが。割を手立し是非に出手に気を持せ
をられの旨趣を失ひを忘れさせ勝負を出させんの謀
恐くハ業のごとく其謀に乗つて取らるゝの様に勝けぬと
ぞせし。聞人過ぐる人々ハ機変を感ぜしとぞ。

巻四畢



翁草巻之五（其蜩菴随筆巻之五）　其蜩翁撰

思ひ出し次第

古老のおごりに今の世有る調度ども
皆有事のやうにおもへども。左にあらず鐶鉈など
云その有れども。今のごとく鏑手を中に鉛見へ近きすへ
昔ハ踏次燭のごとく。爐板に灯蓋を並よせを。小堀
遠州丸き形蛇を仕出しもちひられ今角なる物も。蛇壺
を中に鉛る事始れり。短檠ハ利休時代に有り。古へ
皆燭台に土器をのせたり。古代乃絵にある事なり。
霊山の長嘯子竹檠の記にて
惜しむ日もやられ休の蛇ハ世々の玉請さ枝てさせとや

岡本蔵

孫ゟへ下され。咬𠺕吧年々世話致し候頭役之者へ米
五十俵。連〃りにかひたんへ三拾俵。弥以へ三十俵。片茶
をも下されし。一件相濟まことにありがたし。
巻五 畢 イ要蛸薔随筆巻之五大尾

天明第四辰正月吉日 イ欠

以下イ欠
書肆

江戸日本橋三町目
前川六左衛門

大坂心斎橋南詰
和泉屋卯兵衛

京二条通富小路西江入町
野田藤八郎 板